KSKR パンジーだより　No.84　第三種郵便物認可　通巻第 8106 号　2020 年 5 月 22 日発行

KSKR パンジーだより

一九九六年五月一日　第三種郵便物認可　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行

おだやかに・・・

３月、パンジーのグループホームでくらしている人が、３７度３分の熱を出しました。病院に行っても検査をしてもらえません。何もかもがあいまいな状況でした。新型コロナの可能性を考え、別の住居に移動をしてもらって、経過を見守ることにしました。平熱が続くようになるまで、ひやひやでした。その後も、２～３人が同じ経過をたどりました。

そのような日々をくり返しながら、４月になって、新しい当事者や職員が通い始めました。今は、パンを売りに行くことも、講演に行くことも、メディアで撮影に行くことも、中止しています。みんなで近くの公園に散歩に行ったり、ビデオを見たり、これまでより、おだやかでゆったりとした時間を過ごしています。

一方、社会に目を向けると、これまで誰も経験していない事態に多くの人が不安な日々を過ごしています。そのような状況の中で、人工呼吸器の使用をめぐって、障害を持った人が後回しにされる「命の選別」が行われる可能性があるとも言われています。そのような社会にならないように、しっかりと動きを見つめ続けたいと思います。

そして、新型コロナ収束後、皆さんとこれまでよりも、もっと楽しく出会えることを願っています。

（林　淑美）

ヒマラヤに挑戦した７人の知的障害者がくれたもの

ヒマラヤから帰って１年３カ月。ドキュメンタリー映画「ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの」がようやく完成した。作品はドキュメンタリーだけれどナレーションはない。また、音楽は言葉のないオリジナルの歌を使った。

ヒマラヤに出発する前、カメラを担当した折笠貴と打ち合わせをした時、「ノーナレーションの作品にしたい」と告げた。折笠はしばらく考えた後、その意味を理解したのか「やってみましょう」と答えた。また、音楽を担当した松田美緒は、「映像から感じるインスピレーションで歌う」と、初めての試みに挑戦してくれた。

最近、知的障害を持つ人をテーマにしたドキュメンタリー作品を多く観た。その時に、ある違和感を感じていた。「こんなに障害が重い人が、こんなすごいことを」と、ナレーションの語り口が物語を誘導していく。また、音楽も、ナレーションをあおるような形で付けている。これは、知的障害を持つ人を差別する社会の価値観と同じではないのか。

パンジーで活動する当事者と５年間向き合った中で、自分の中にも社会の差別的な価値観があったことに気づいた。この作品では、知的障害を持つ人をできる限り何のフィルターも通さず観て欲しい。何の先入観も持たずに感じて欲しい。撮影した５０時間の映像素材を編集していた１０カ月の間、この問いと向き合った。そして生まれたのがこの作品だ。

完成する前の試写会で「最初は、こんなに障害の重い人がヒマラヤに登れるのだろうかと思った。ところが日に日にみんなが変化していく。そして、最後には誰が障害者か健常者かの区別はなくなった。みんな一人の人間なんだ」という感想が寄せられた。

作品は、完成した後は一人歩きをする。観た人が何を感じ、そこから何を発見するのか自由だ。できれば、７人の姿からこれまでとは違う知的障害者への眼差しを見つけて欲しい。

作品には多くのスタッフが関わったが、本当の作り手は、ヒマラヤに挑戦した７人。私たちスタッフは、それを手伝っただけかもしれない。

パンジーメディア
エグゼクティブプロデューサー　小川 道幸

何のためにするのかという意思

パンジー　ネイチャークラブ　だより

パンジー山岳部の計画書は、障害を持つ当事者が自然に触れるためのノウハウを支援者が見出し、部員の活動の場を広げて豊かな感性を育てることが目的のひとつとして書かれています。わたしたちはこの活動を通して、健康的な体を作り、多くの当事者の可能性を広げることを目指し、その先にヒマラヤという大きな目標を掲げました。

当事者が山に登るということには、通常の技術や準備とは違った視点で考える必要がありました。小さな変化に気付くことや、あらゆる状況を想定して事前にリスクを減らしていく作業がとても重要でした。しかし支援者の介入が行き過ぎてしまうと、当事者が自分で考えて経験する機会を狭めてしまうことにつながります。知識やスキルを積み上げることだけに一生懸命になるのではなく、その人が持っている力に当事者本人も気付けること、その力を引き出して発揮する為の支援、そして仲間と経験を共有することで当事者と支援者がともに強くなっていく。ヒマラヤでの経験は、挑んだ目標の中で、当事者や支援者の立場に関係なく、みんながいたからできたというチームの強み、ワンチームの力が一人ひとりを変えていったのだと感じています。

２０１９年から山岳部は名称をあらため「ネイチャークラブ」として活動を続けています。平坦な道であっても日常の歩き方から改善する必要のある人、体重などの体調管理、普段の生活の中で運動する機会がこれまでほとんど無かった人など、すべてが一からスタートするメンバーも少なくありませんでした。しかしすぐに何かを達成しようとするのではなく、毎日のウォーキングや筋力をつけるための体操を継続し、初年度は日々の生活の中で健康的な体作りをしていくことを基本に活動してきました。そして、ヒマラヤの経験があるメンバーは、これまで自身が蓄積してきたノウハウを今度は新しいメンバーに伝える存在となり、自らも成長していくことが、現在のネイチャークラブでの目標です。何をしたかという成果だけではなく、何の為にしたかという意思を大切にしながら、今後も活動していきたいと思っています。

映画「ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの」は、7 人の当事者が身を持って提示してくれた「どう在るか」という生きるメッセージが強く心に響く作品だと思います。

ネイチャークラブ：　北田　徹

ドキュメンタリー映画
「ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの」予告編
パンジーメディアのＨＰより
https://pansymedia.com/

なぜ、この事件が起こったのか
～やまゆり園事件について考える～

３月 16 日、横浜地裁で行われた相模原障害者施設殺傷事件の裁判で、植松被告に死刑判決が出された。その後、判決は確定した。

この裁判は、事件に注目し続けている知的障害を持つ人たちにとっても大きな関心事ではあったが、彼らが本当に関心を寄せるのは植松死刑囚のことではなく、事件があっても今もなお、入所施設の暮らしを余儀なくされている仲間のことである。

２月 20 日、神奈川県庁に 450 人の知的障害者とその支援者が集まった。津久井やまゆり園で過ごしている人たちが地域で暮らせるように、神奈川県・黒岩祐治知事に要望したのだ。ピープルファーストジャパン・中山千秋会長、ピープルファースト横浜の小西勉会長らを中心に、要望書を読み上げ、黒岩知事に地域生活の実現を訴えた。パンジーからは約 30 人が行動に参加した。

この行動は、パンジーメディアの取り組みの一つ、「パンジーの眼・ブレーン会議」での話し合いがきっかけとなった。この時、津久井やまゆり園やその系列施設で当時行われていた虐待が次々と明らかになっていた。車いすにずっと縛りつけていたり、個室の外からの施錠など、身体拘束が当たり前に行われていた。ブレーン会議でその話を知ったパンジーメディアの当事者からは、「自分たちも同じ体験がある」「障害者の声を聞こうとしないから何も変わっていない」そんな声があがった。自分たちの思いを発信し、社会の人たちに理解して欲しい。その思いを強くしたパンジーの当事者たちは、やまゆり園のある横浜の仲間と協力して、この行動を実現させた。

この日、黒岩知事は集まった当事者らを前に「二度と事件が起きないように全力で取り組む」と発言した。およそ４年前の横浜大会でも知事は同じ発言をしている。ならばなぜ、津久井やまゆり園での虐待が約４年たった今になって明らかになったのか。きぼうのつばさ３月放送で、横浜・社会福祉法人同愛会の高山和彦理事長がこんなコメントを寄せてくれた。「知的障害者が１５０人も生活する施設がなければ、この事件は起きなかったのです」「なぜ障害者の幸せを実現する施設で、意思疎通の困難な人を心がないと思う職員が育ったのか、本当に施設は必要だったのでしょうか」。

事件から４年が経とうとしている今まで、この問いに社会は向き合えていなかった。３月放送は「事件が本当に終わるのは、日本からすべての入所施設がなくなった時だ」と結ぶ。パンジーは２５年以上、入所施設をなくすべきだと当事者とともに訴えてきた。これからも当事者とともに行動し続けていきたい。

（福岡　挙）

高松にオープンして１年が経ちました！

クリエイティブハウス「パンジーV」

パンジーＶが香川県高松市にオープンして早一年。最初は１日の通所者は２～３人でした。それが１年経ち、毎日１１人以上が通うようになりました。今も、見学者や体験希望者が後を絶ちません。

パンジーＶは、ゆっくりとした空気の流れる場所です。ウォーキングに行き、畑仕事をして採れた野菜を洗って出荷する、空いた時間にゆっくり軽作業をし、採れたての野菜を使ったお昼ご飯を食べる。土曜の開所日はみんなでハイキングなどに出かけ、お弁当や外食を楽しむ、そんな過ごし方です。大阪から研修でパンジーＶに来た当事者も、このゆっくりとした空気の中で穏やかで楽しそうです。スタッフも普段とは違う当事者の姿や、自分自身が余裕を持って支援する中で学ぶことがあります。私もそんな大阪スタッフの一人でした。その時は自分が高松に引っ越してくるとは思ってもみませんでしたが（笑）。人数が増えてきたので、みんなで出かけるのは大変になってきましたが、それでももうしばらく、こんなペースで活動できたらと思います。

この１年で、当事者も変わりつつあります。それまで周囲に遠慮がちだった大野さんは、自分を主張するようになりました。家でもお母さんに反抗するようになったそうです、と言っても微笑ましい感じの反抗なのですが･･･。お母さんも嘆かわしいやら、嬉しいやら複雑そうです。内田さんは体調不良と環境の変化もあってか、年末は不調になりました。家族とともに身体面と精神面のアプローチを続け、徐々に復調し、今では毎日、笑顔で過ごしています。その笑顔を見ると癒されます。引っ込み思案の矢野さんは、ピープルファースト大阪大会では香川県代表としてステージに上がり、実に堂々とした姿に、感動しました。他の当事者も、いろんな変化や成長をしています。そんな当事者と一緒に、スタッフも成長している感じです。これからも紆余曲折しながら、共に歩んでいけたらと思います。

パンジーＶ　植田 弘

各場だより

チームの一員に

パンジー

私がパンジーに入職してはや1年になりました。最初は当事者の名前と顔を覚え、一つひとつ関わり合って行こうと思っていました。

パンジーに来て、まず自分の思いを伝える事が難しい方が多いと感じました。どうしたらみんなと関わる事が出来るのか毎日が勉強でした。皆さんの動きや表情から、何を伝えたいのかを見守りました。段々と私が思っているより、皆さんは自立しているのだと分かってきました。当事者が何かをしたい時に支援者の都合で早くさせようとすると、その人は嫌な気持ちになるし、成長も可能性もストップする。私が思っている以上にパンジーの人たちは自分の気持ちを表現できているのだと分かってきたのです。

パンジーで過ごした1年。当事者、職員、介護者、みんな一つの大きなチームで仲間だなと感じるようになりました。楽しいことは楽しんで、辛いことは、みんなで解決する。このメリハリのある仕事を、私は楽しんでいます。これからも学ぶことはたくさんあると思います。成長して、しっかりとチームの一員になっていきたいと思います。（西村　佳史）

素敵な笑顔で

パンジーII

この4月で、パンジーで働き始めて1年になりました。同時に、私は社会人としても、1年が過ぎました。最初の頃、働くことの緊張感や責任の重さを感じながら、毎日ドキドキしていました。

しかし、当事者の人と過ごす中でドキドキした気持ちが変わってきました。毎日、新しい発見やさまざまな気付きがありました。寺尾啓子さんは、「お茶入れて」「本取って」と職員に話しかけてくれます。最初の頃は、寺尾さんのことをよく知らなかったため、さまざまな質問をすることがコミュニケーションの中心でした。しかし、お母さんから寺尾さんは歌が好きだと聞き、ある日ふと歌をワンフレーズ口ずさんでみたのです。すると寺尾さんは、素敵な笑顔でその続きを歌ってくれました。それから言葉でのやりとりだけでなく、一緒に手拍子しながら歌を歌うことがコミュニケーションのひとつになりました。寺尾さんは歌を本当にたくさん知っていて、歌っている時にとても素敵な表情を見せてくれます。こういった新たな発見や気付きの瞬間、うれしかったことをとても鮮明に覚えています。

今年度からはパンジーの職員として2年目になります。1年目と同じように当事者の方ひとりひとりを新鮮な視点から見て、気付きや発見を日々積み重ねていくこと。そして2年目だからこそ、これまで積み重ねてきた気付きや発見を次に生かしていく事ができたらと思っています。そして当事者の方と一緒に笑顔の多い日々を過ごしていきたいです。

（前岡　莉乃）

自分の場所をきれいに

パンジーⅢは、15時15分からも活気がでる。朝から作業をして終わるのを楽しみにしているからか？みんないっせいに掃除をするのだ。持ち場をほうきや雑巾などでしっかりと掃除をする10分なのだ。ある人は窓を拭いたり、ある人は雑巾で椅子を拭いたり、もちろん職員もできる限りいっしょにする。自分の場所はきれいにしたいという意気込みを感じる人もいる。

毎日ゴミ捨てに行く谷口さんは、入院を経てグループホームに入居された。入院前は厨房でしっかりと働いていた。退院後は、足もとがおぼつかず座ってできる軽作業を中心にしていた。みんなで持ち場を決めて掃除をしようと話しあったときに、真っ先にゴミ捨てをしていた。すべてのカゴを集めて一つにまとめて捨てる。谷口さんのペースだが、最初から最後まで一気にするのだ。谷口さんの仕事にしっかりと取り組む姿勢を学んだ。

厨房は、外部弁当の注文の数が増えた。外部の作業所は私たちの弁当を昼ごはんに注文してくれる。「玄米ご飯がおいしい」と声をかけてくれる。配達で届けた時に、こころまちにしている顔を見て、持っていくのも楽しみになる当事者もいる。

4月から新卒者1名、パンジーから2名増え、とても賑やかだ。賑やかだけではなく仲間同士のつながりが生まれることを思ってかかわっていきたい。

（池辺　昌史）

わくわく

新型コロナ感染予防と移動支援

普段、わくわく活動では、たくさんの当事者が休日を利用して、ガイドヘルパーとの外出を楽しんでいます。

行き先を家族や支援者と相談して、週末を楽しみにしている人もいるでしょう。ただ、あまりに毎週出かけることによって、行き先がわからない、どこに行ったらいいの？との悩みもよく聞くようになりました。わくわくで行き先の情報提供をさせてもらうのですが、やはり長い人で、30年近く毎週出かけている人に提供できる目新しい情報もなかなかなく、毎週楽しめる趣味でも作る手伝いをしないとな、と感じていました。

ところが、この新型コロナウイルスによる緊急事態宣言下では、行き先の情報提供どころか、わくわく活動を大幅に縮小する事態になりました。今までは、公共交通機関を使って、映画、カラオケ、イベント、グルメ、スポーツを楽しんでいた人には、公共交通機関をつかわない「気分転換の散歩」の提案にとまどう人も多いようです。普段行かない地元の遺跡や史跡をめぐる、地元の公園でたくさん歩く、または、行政によっては移動支援で居宅内で過ごすことが認めてもらえているので、パンジーメディアの「パンジーキッチン」を参考にクッキングなどで楽しむことはできるのかな？と考えたりしています。

ただ、経路不明の感染者も増えていっています。どこで感染するか誰にも分からない状況です。ここは、当事者も支援者も努力してのりきるしかないのだと思います。

次回のパンジーだよりでは楽しく、わくわく報告ができることを願います。

（吉竹　敦生）

書き損じハガキ、（未使用）切手を送ってください！

ご家庭や会社などで書き損じのハガキ、スタンプを押していない切手など眠っていませんか？
当事者活動部門ではこれらを集めて活動資金にあてています。ご協力お願いします。
赤瀬久美子　　西田美和子　　宮田程子　　仁木ゆかり　　井上アサ子　　久保勝美

パンジーでは、後援会員を募集しています。

賛助会員　１口　1ヵ月　　５００円　　本会員　　１口　1ヵ月　1,０００円
特別会員　１口　1ヵ月　3,０００円　　郵便振替番号 00950-1-300551　ｸﾘｴｲﾃｨﾌﾞﾊｳｽ「パンジー」

編集人
東大阪市東鴻池町２－４－８
ｸﾘｴｲﾃｨﾌﾞﾊｳｽ　TEL:072-963-8818
「パンジー」　FAX:072-963-8825

発行人
関西障害者定期刊行物協会
大阪市天王寺区真田山町
２－２　東興ビル４階

編集後記
人と人、国と国のつながりを、大切にしていきたいです。みんな仲良く。精一杯の想像力を働かせて・・・。（よ）

一九九六年五月一日　第三種郵便物認可　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行　定価　一〇〇円